

羽田先生追憶

会長 吉田光邦

西アジア研究の先達としての羽田先生と、わたしの人生との交錯は、1959年にはじまった京大のイラン・アフガニスタン・パキスタンの調査事業においてであった。早く世を去られた水野清一先生をリーダーとして計画されたこの調査隊のために、その半年ほど前から研究会がずっと開かれていた。その席で先生とはじめてお目にかかったのである。先行する欧米のいろんな発掘調査や旅行者の報告を集めて相互に紹介してゆくのが、そのおもな内容であった。

調査隊の日程もきまって羽田先生と会員の井本英一氏、それにわたしの3人が先発し、イラン当局との交渉、宿舎などの手配にあたることになった。季節はもう夏である。そのなかを3人は南回りの空路でテヘランへ飛んだ。そしてテヘランでは、イラン国内の調査旅行の許可をめぐる長い交渉がつづいたのである。

そのころのイランは英語は全くといっていいほど通ぜず、交渉はすべてフランス語だった。となると唯一の頼りは羽田先生である。毎日のように考古局へ出かけていった。そのなかでギルシュマンにも会い、先生とともに彼の宅へ招かれたこともある。それとともに井本氏は宿舎を探し、わたしは調査隊の荷物の引取交渉があった。特に大量のフィルムの通関は難事であった。

だがそんななかでも羽田先生はいつも元気で、しかもダンディであった。紺のベレーと青いシャツがよく似合うといった感じだったことを、わたしは今もはっきりと覚えている。それからあと数か月、ほとんど先生と行をともにしたのだが、先生はいつも健康にすごされていた。自分の身体の限界以上のことはしないからな、と時折いわれたものである。このときの調査旅行のプランはほとんどわたしがつくったが、なかにはかなりきびしいコースもあった。それにもよく耐えていただいたと、今更ながら考えることである。

文学部に移られてからは、研究室をお訪ねすることが時にはあった。用件がすむと必

ずとっていいほど、59年の調査旅行の思い出ばなしとなった。あの半年にわたる旅行は、先生にとっても思い出ばなしの旅であつたらしい。もちろんわたしにとってもそれは同じなのだが。

その先生がわたしどもの世界から去ってしまわれた。仕事の方向が先生とはクロスしなかつたわたしには、先生との交点はどうしても個人的なものとなつてしまう。だが70年のわたしの人生のなかでも、羽田先生は濃い印象を残してゆかれた先師であつた。それは西南アジア研究のただなかにある人びとも同様であらう。そしてともどもに先生の業の巨いさをおもい、西南アジア研究会の発展によって、先生におこたえしたいと、わたしは考える。